

音楽とは 横への感性なり!

合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

10 月号

2020 年 10 月 1 日

編集・発行

ウィーン岐阜合唱団

コロナ禍の中・・・「初秋コンサート」開演される 岐阜 テノール 田口 舘男

8 月 30 日(日) 「初秋コンサート」がウィーン岐阜ホール(ときめき)で開演されました。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため声楽は取り止め楽器演奏のみ、演奏者も観客もマスク着用、間隔を離してというやり切れない雰囲気でのスタートでした。

しかし、演奏が始まると演者も観客も水を得た魚の如く会場の雰囲気は、次第に熱気を帯びてきました。

演者の曲目説明に耳を傾け、美しい調べに惜しみない拍手を送る繰り返しは、アンコールを含め 13 曲におよびました。平光真彌さんの表現豊かなヴァイオリン、山田真吾さんの重厚なチェロの響き、そして平光先生の二つの弦楽器を引き立たせるために作曲されたピアノ伴奏は、皆さんを陶醉させるには十分でした。

ここまででコンサート全体の雰囲気を感じ取って頂ければ有難いです。なぜならば、クラシック音楽について浅学の私には、このあと個々の楽曲演奏について語る言葉が浮かんでできません。そこで、チェロの山田真吾さんが話されました『パブロ・カザルスの国連でのチェロ演奏について』を紹介することで、紙面を埋めさせていただき事をお許し下さい。

パブロ・カザルスの国連でのチェロ演奏について・・・山田真吾さんのお話

最近の日本の若手チェリストは世界的にも優秀で、そのテクニックは素晴らしいものが有ります。そういう事も有り、楽器演奏では『テクニック』が『心』に勝ると思っていました。

しかし、パブロ・カザルスの国連でのチェロ演奏を聴いて、これは間違いなく『心で弾いている』と感銘を受けました。

パブロ・カザルスの経歴&国連でのチェロ演奏について・・・ウィキペディア (Wikipedia) より

パブロ・カザルス (Pablo Casals 1876 年— 1973 年) は、スペインのカタルーニャ地方に生まれたチェロ奏者、指揮者、作曲家。

チェロの近代的奏法を確立し、深い精神性を感じさせる演奏において 20 世紀最大のチェリストとされる。有名な功績として、それまで単なる練習曲と考えられていたヨハン・ゼバスティアン・バッハ作『無伴奏チェロ組曲』(全 6 曲) の価値を再発見し、広く紹介したことが挙げられる。

早くから世界的名声を築き、ヨーロッパ、南北アメリカ、ロシアなどを演奏旅行して回った。指揮者フルトヴェングラーはチェロ奏者としてのカザルスへ次のような賛辞を残している。「パブロ・カザルスの音楽を聴いたことのない人は、弦楽器をどうやって鳴らすかを知らない人である」。

カザルスは平和活動家としても有名で、音楽を通じて世界平和のため積極的に行動した。

1971 年 10 月 24 日、カザルス 94 歳のときにニューヨーク国連本部において「私の生まれ故郷カタルーニャの鳥は、ピース、ピース (英語の平和) と鳴くのです」と語り、『鳥の歌』をチェロ演奏したエピソードは伝説的で、録音が残されている。

国連での『鳥の歌』のチェロ演奏を聴きました。どこまでも澄み渡った大空を自由に舞う鳥たちの映像、聴く人の魂を奮い立たせる響きです。秋の夜長、ウイスキーでも片手に一度お聴きになって下さい。

♪ やわらかな音色 ♪

岐阜 アルト 清水 みち子



平光真彌さんのとろけるようなヴァイオリンと山田真吾さんの少しダイナミックな味付けのチェロ、そして、それを甘い柔らかな音色の平光先生のピアノが包み込む素敵な初秋コンサートを聴きました。

平光先生のピアノの音は柔らかいと思っていましたが、今回はいつもに増して、甘く、優しく、丸い音

色で、この曲をお好きなのかしらと思うほど愛情のこもった音色でした。ふっと思い出したのが、指揮法講座で『自然の摂理に沿った腕の動き』、これは水琴窟の一粒の水滴が優しく ぽとんっ！と落ちて奏でる優しい響き、いつもおっしゃっている『脱力』はこれなのではないでしょうか？



合唱へ募る思い

岐阜 アルト 高橋 奈緒子

皆様、いつもと違う夏をいかがお過ごしでしたか？例年なら7月の定期演奏会が終わり、晴れやかで開放的な気持ちで暑さと向き合い、帰省する家族や親戚と集い、お盆の祭祀や伝統行事、お祭り等…目白押しイベントにてんてこ舞いし、秋風たち初め凌ぎ易くなる頃、ふと我に返り、疲れ切った我が身を嘆いている私でした。しかし、いざ何も無くなりステイホームを強いられると、今までなんと些細なことに悩み焦っていたのか、小さく見えて大きな幸せを感じずにはいられません。私の中で価値観が大きく変わり、全ての事に自ずと感謝の気持ちが湧いてきています。合唱においても例外ではありません。ウィーン合唱団で、10年以上、当たり前のように歌わせていただいていたのが、当たり前ではなかったと。4ヶ月間のレッスン自粛で、生活から彩が消え失せなんとも寂しく、私にとって合唱がどれほど大切な事であったか、改めて思い知りました。無くした為に無聊をかこつてもしょうがないので、一人練習を試みるも、一向に気持ちが高揚しません。私は、ただ歌いたいのではなく（実力がないのですが）平光先生の指揮の下、先生の情熱や歌に寄せる思いを共有させていただき、各パートの息遣いや音色を感じ、一つのハーモニーが創りだされ、そこに自分の声を溶け込ませる、そんな瞬間に醍醐味を味わっていた事が明確になりました。

私は小学校の6年間、ピアノを習っていましたが、

音楽を楽しんだことはありませんでした。練習をさぼって怒られ、弾き間違えれば手の甲をピシッと叩かれ、今思えば、ピアノの先生の愛の鞭と分かりますが、当時の幼い私には、先生の愛を感じず事無く、音楽は難しいと苦手意識だけを持って大人になってしまいました。そんな私に、音楽は楽しく人生のエッセンスであり、皆と奏でる音楽はなお楽し…と感じさせてくださったのが、平光先生であり団員の皆様です。“ふるさととは遠きにありて思ふもの”の心境の如く、私は合唱から遠ざかれば遠ざかるほど、心が離れていくのではなく、なんとも遣る瀬無ですが、気持ちは合唱への思いが募るばかりです。きっと、皆様も同じお気持ちではないでしょうか。コロナ禍において、誰が何が悪いわけでもなく、何が正しいかも分からず、先の見えない不安と恐怖を抱えた厳しい状況ですが、スタッフのご尽力により、合唱のレッスンが再開されました。合唱のレッスンに限らず、これからは、各々が生活全てを見直し、期待値を変えて慎重な行動を心掛けなければなりません。ですから、今参加されない方も決して後ろめたく感ずることは無く、ひたすら気持ちを安定した根へと伸ばし昇華させればよい時期と思われま。なぜなら、全て自身で治めるべき事だから。

今は、一日も早く、思いっきり深呼吸して歌い笑い抱き合える日が訪れるよう、ただただ願うばかりです。



ウィーン岐阜合唱団 第9回ヨーロッパ 音楽・友好の旅



リトアニア・ポーランド音楽紀行♪ 1 ♪ (2018. 5/23-6/2) 川浪 進

一行 40 余人を乗せたフィンランド航空機が名古屋セントレア空港を軽やかに離陸して、リトアニア、ポーランド音楽友好の旅が始まった。

岡山の谷本君から、自分の弟子である清水先生の所属しているウィーン岐阜合唱団が彼の地へ旅行することになっているので、一緒に参加したらどうやとの奨めが来た。岐阜は、かの杉原千畝氏の故郷であり、太平洋戦争時のことであるが、杉原氏がリトアニアで外交官として働いていた時、ユダヤ人にヴィザを発行して多くのユダヤ人を助けたことから、かねてよりリトアニアと岐阜は友好関係にあったそうである。

バルト三国は国を挙げて、合唱が盛んであり、この度、リトアニアは岐阜の合唱団と何度目かの交歓をすることになったと言う訳だ。

バルト三国なんて滅多に行く機会はないし、エキゾチックな風物の国に手ぶらで行くのは勿体ない、スケッチブックを持って絵三昧の野次馬で参加しよう決めて、早速、清水先生に打診したところ、どうぞ、野次馬でも構いません、との返事もらった。私と同じく整形外科開業医の一線を引退した中根君も参加すること、彼とは年来、テニスでは遊んでいたが、コーラスをやっているなんて知らなかった。第一回の練習日、その日は各務原の川畔に桜が満開で、河原に座って中根君と花見弁当を使った。さて、二人して会場を訪ねたところ、もう、嫌も応もなく、いきなり、第九の楽譜を渡された。もとより、音楽は嫌いではなく、半世紀も昔になるが、北大オケではフルートで第九に参加して、この曲は隅々まで知っている積もりだ。しかし、歌となると、生半可な練習で歌えるようになる筈もなく、まあ口パクでいやと腹をくくって、こうして、北欧への機中の人となったわけだ。

5/23 14:40 9時間余のフライトでヘルシンキ空港に着陸。亜寒帯白夜の国なのに、この暑さはどうだ。早速、市内観光、岩の中にある珍しいテンペリアウ

キオ教会、いきなり、発音不能意味不明の地名。ここでも、楽器を奏でる人々が居て、なんとも言えぬ、荘厳な雰囲気である。ヘルシンキと言えば 1952 年、ここでオリンピックがあった事を知る人はもう少なくなっただろう。なにしろ、あの古橋が 400m自由形で出ていたんだから、昔も昔、大昔だ。小学 5 年の時、突如、クラスメートの一人が「ヘルシンキ」を「ヘルキシン」と言ったので、教室がわっと沸いた。65 年前。

「ヘルキシン」と言いし友あり懐かしき

ホテル プレジデンティに旅装を解いた。時差は 6 時間で、夜は 9 時ころやっとなんげかして日が暮れる。

5/24 早朝、4 時でも、既に明るい。夜の帳が徐々に天地の堺を分けると言った微妙な瞬間はないのか。いきなり朝が待っている。

早速、ホテル前でスケッチ。椅子を忘れて来たので、地べたに尻を降ろすしかない。

変な爺さまが地べたに這いつくばって、爆弾でも仕掛けてるのかと思ったかどうか、パトカーが傍まで来て、一瞥、走り去った。ロシアや北朝鮮、中国なら、訊問、下手したら、引っぱっていかれるかもしれない。



リトアニアの旅はまだまだ続きます…

11月号をお楽しみに！！

10～11月 練習予定

10月からの練習時間は18:45～20:30です(18:30までに集合しましょう)

月 日	岐 阜	月 日	大 垣
10月 1日(木)	長森コミュニティーセンター	10月 2日(金)	大垣市南地区センター
10月 8日(木)	長森コミュニティーセンター	10月 9日(金)	大垣市南地区センター
10月15日(木)	長森コミュニティーセンター	10月16日(金)	大垣市南地区センター
10月22日(木)	長森コミュニティーセンター	10月23日(金)	大垣市南地区センター
10月29日(木)	長森コミュニティーセンター	10月30日(金)	大垣市南地区センター
11月 5日(木)	長森コミュニティーセンター	11月 6日(金)	大垣市南地区センター
11月12日(木)	長森コミュニティーセンター	11月13日(金)	大垣市南地区センター
11月19日(木)	長森コミュニティーセンター	11月20日(金)	大垣市南地区センター
11月26日(木)	長森コミュニティーセンター	11月27日(金)	大垣市南地区センター

☆ 10月の練習時間・体制等は、変更になることもありますので、ご注意・ご了承ください。

音楽家の名言 あなたの演奏を変える127のメッセージ より

作曲家は、どれ程才能を持ってしようと、詩人が彼の内に情熱をかきたてない限り、
平凡な音楽しか書くことができない。

情熱なくしては、いかなる芸術分野の作品も、弱々しく乾涸びたものになる。 ……グルック

《マリー・アントワネットの音楽教師はオペラの改革者》

クリストフ・ヴィリバルト・グルック(1714～1787)は、ドイツ生まれの作曲家です。

特に、オペラの改革に貢献したといわれています。

グルックは、1754年のウィーンにおいてマリア・テレジアの宮廷楽長となり、娘マリー・アントワネットの音楽教師も務めました。

マリー・アントワネットといえは少女時代に6歳のモーツァルトが御前演奏をしています。

その際、転んだモーツァルトは、助け起こしてくれたアントワネットに求婚したという、おませなモーツァルトらしいエピソードが伝えられています。1773年、グルックはフランス王妃となったアントワネットに随行してフランスに渡ります。

アントワネットはハープを巧みに演奏し、作曲のたしなみもあったようで愛らしい歌曲をいくつか残しています。

これも、グルックのおしえの賜物です。その後、グルックは再びウィーンに戻りこの地でなくなっています。

グルックがここで語っている“情熱”とは、“音楽への愛”と置き換えてもおかしくないでしょう。

“愛と情熱”という肥料を惜しみなく与えてこそ、才能は大きく開花していくものなのです。

